仲間に関する幼児の性格特性概念

林智幸¹ 湯澤正通 広島大学

What dimensions do young children's trait concepts have for peers?

Tomoyuki Hayashi and Masamichi Yuzawa (Hiroshima University)

This study investigated what dimensions young children's trait concepts have for real peers at their nursery school. Teachers of nursery school rated children's personality characteristics in terms of each dimension of the Big Five, and children were selected who showed different behavioral characteristics in those the five dimensions. Five- and six-year-old children (26 participants: 14 boys and 12 girls) evaluated those selected peers' personality. It was found that young children made different evaluations between extroversion and the other four traits (agreeableness, conscientiousness, emotional stability, and intellect), and between agreeableness and intellect. The results suggested that young children's trait concepts have a dimension of extroversion, in addition to a general dimension of goodness-badness.

Key words: trait, young children, Big Five, peers.

The Japanese Journal of Psychology
2006, Vol. 76, No. 6, pp. 554-559

人間生活を営む上で他者の行動を予測する能力は必要不可欠である。他者の行動予測を効率的に行うために、他者に想定する安定的な行動傾向を一般に“性格”と呼ぶ。このような他者性格の認知能力は、幼い時期から見られることが分かっている。

幼児の性格認知に関する研究はこれまで数多く行われている（林, 2004; Heller & Berndt, 1981; Yuzawa & Harano, 1996）。初期の代表的研究の一つとして、Heller & Berndt (1981) が挙げられるが、彼らによる5—18歳の幼児・児童を対象とした研究において、5歳児でも提示された物語を予測の根拠として用いていたことは、幼児が性格特性の一貫性を理解していることを示唆している。

Yuzawa & Harano (1996) は、4—6歳児を対象に四つの異なる場面において実在（実験参加児自身）・架空の人物に対する優しい・意地悪な・どちらでもない（中立的）仲間の行動予測をそれぞれ行わせた。分

析の結果、4歳児は意地悪な仲間よりも優しい仲間の行動を優しいと予測し、5、6歳児は中立的な仲間よりも優しい仲間の行動を、意地悪な仲間よりも中立的な仲間の行動をそれぞれ優しいと予測する傾向にあった。また、行動の対象が架空の人物ではなく実在の人物（実験参加児自身）であった場合に4歳児が意地悪な仲間をより一貫して意地悪だと予測していた。

これらの研究は、幼児の性格特性概念が、成人のそれと同様、状況を通して一貫していることを示している。しかし、他方で、幼児の性格特性概念が、成人のそれと異なり、内容的に未分化であることを示唆する研究が行われている。林（2004）は、幼児の性格特性概念に関する研究が性格の特定の次元のみを取り上げてきたことを批判した（例えば、“優しい”，“意地悪”：Yuzawa & Harano, 1996；“寛大”，“利己的”：Heller & Berndt, 1981）。そして、性格がビッグ・ファイブと呼ばれる広範な五つの特性によって包括的に記述可能であるとする“ビッグ・ファイブ”説に基づき、ビッグ・ファイブ場面における幼児の行動予測能力と彼らの特性概念の内容について検討した。具体的に、幼児に物語を提示し、その登場人物の別の場面における行動予測を行わせ（研究1）、またその登場人物の性格特性を判断させた（研究2）。その結果、5、6歳児は、複数の場面で一貫した行動の予測を行うが、五つの特性次元を明確にせず、ポジティブ・ネガティブのような単一の次元で他者の性格を判断していることが示唆された（例えば、元気な子に関して、別

Correspondence concerning this article should be sent to: Tomoyuki Hayashi, Graduate School of Education, Hiroshima University, Kagamiyama, Higashi-Hiroshima 739-8524, Japan (e-mail: thayashi@hiroshima-u.ac.jp)

¹ 本論文のデータは、2003年度広島大学教育学部心理学科に提出された宇野有紀子氏の卒業研究に基づいています。使用許可を下された宇野有紀子氏、ご指導、ご助言を賜りました松田文子先生をはじめとする教育心理学研究室の皆様に深謝申し上げます。最後に、本研究のための調査にご協力賜りました川上中部保育所の先生方、青組の園児の皆さん、広島大学教育学部心理学科の学部生の皆さんに厚く感謝申し上げます。

の場面で元気な行動を行うと予測するが、同時に、優しく、頭がよいと判断する)。

しかし、林 (2004) の結果から“幼児は未分化なビッグ・ファイブ概念しかもっていない”と結論づけるのは早急である。なぜなら、判断の対象が物語の登場人物という架空の存在だったために経験や想像力において未熟な幼児には未分化な判断しかできなかった可能性も考えられるからである。幼児の性格認知に関する他の多くの研究も架空の人物の行動予測という方法を採用している (Heller & Berndt, 1981)。確かにこのような方法を用いれば予測の対象となる人物の性格を自由に統制でき、幼児の言語能力の未熟さもカバーできる。しかし、Yuzawa & Harano (1996) の研究では予測の対象が架空である場合よりも実在である場合の方が幼児は適切に予測を行っていることが指摘されていた。また、林 (2004) の研究 2 では、行動予測ではなく、架空の人物の性格特性を抽象的な性格形容詞によって直接評定させたため、幼児にとって困難であったことも考えられる。

そこで本研究では、実在の人物 (ここでは、保育所のクラスの仲間で、担任保育士によってその性格特性を評定された者) を対象に、ビッグ・ファイブの次元に対応する行動の予測をさせることにした。幼児の性格概念がポジティブ-ネガティブのような単一の次元から構成され、幼児がそれに基づいて仲間の行動を予測しているならば、同一の仲間によるポジティブな行動 (例えば、外向性の行動と協調性の行動) は、大人 (担当保育者) によって異なる評定が行われていても、幼児によって同じように予測されるはずである。一方、架空の人物を対象とした場合と異なり、クラスの仲間との日常的なかわりの経験によって、幼児であっても、ビッグ・ファイブのいずれかの次元を相互に区別している可能性が考えられる。もし幼児がビッグ・ファイブの次元を相互に区別しているならば、それらの次元に関して担任保育士が異なった評定を行った仲間 (例えば、“外向性”が高く、“協調性”が低い) に対して、同様に、異なった評定を行うことが予想される。

方 法

予備調査

幼児を対象とした調査ではクラスの仲間の 5 特性について評価してもらうが、その際に 5 特性を幼児に理解できるように表現したものが必要となる。また、それらの表現は可能な限り当該特性のみの要素を純粋に代表し、それ以外の要素は含まれていないものでなければならない。そして、実在の仲間を評価してもらうため、ネガティブなイメージを誘発しやすいネガティブな表現を用いないことを配慮した。そこで調査者側

の主観に基づいたさまざまな表現を用意し、それらを大学生に評定してもらった²。調査の対象が幼児であることを考慮し、表現の内容は観察可能な行動とした。評定の方法は、各表現に五つの特性の要素がそれぞれの程度含まれているかを両極にポジティブ特性とネガティブ特性を配した 5 段階尺度を用い、5 特性すべてについて評定してもらうというものであった。ポジティブ特性に“非常によくあてはまる”を +2 点、“わりとあてはまる”を +1 点、“どちらともいえない”を 0 点、ネガティブ特性に“非常によくあてはまる”を -2 点、“わりとあてはまる”を -1 点として評定を得点化し、得点の平均値・標準偏差を算出した。調査用紙とともに村上・村上 (1999) による 5 特性の定義を配布し、それを参考にさせることで評定者の主観的なビッグ・ファイブを統制して評定の客観性が高まるよう努めた。表現の採用基準を、(a) 当該特性の得点の平均値が +1 点から +2 点の範囲にあること、(b) それ以外の 4 特性の得点の各平均値が -1 点から +1 点の範囲にあること、(c) (当該特性の得点の平均値) - (それ以外の 4 特性の得点の各平均値) ≥ 0.5 であることとし、すべての表現が (a) から (c) を満たすまで修正を加えながら繰り返し評定を行った。5 回目の評定で採用基準を満たした 5 種類の表現がすべて揃ったが、確認のために同じものを再度評定してもらい (最終調査)、さらに各表現が最も強く表していると思われる特性を 5 特性のなかから一つだけ選んでもらった。後に、選んだ特性の評定者内での一致率を算出した。最終的に採用した各表現についての最終調査における得点の平均値・標準偏差、および特性の一致率を Table 1 に示した。

本調査の方法

参加者 保育園に通う年長児 26 名 (男児 14 名、女児 12 名) で、平均年齢は 5 歳 11 カ月、年齢の範囲は 5 歳 8 カ月から 6 歳 7 カ月であった。実施時期は 11 月であった。

特性判断の対象の選別 まず、保育園の担任保育士に園児一人ひとりにおける 5 特性について評価してもらった (5 段階評定。“全くあてはまらない”, “あまりあてはまらない”, “どちらともいえない”, “わりとあてはまる”, “非常にあてはまる”の 1-5 点)。その際の 5 特性については、予備調査で吟味した、ネガティブイメージを誘発しにくいポジティブな 5 種類の表現を用いた。担任保育士による評定を“成人による分化した判断”とみなし、これを参考に参加者全員のな

² 本研究は、成人の対人認知モデル (ビッグ・ファイブ的対人認知モデル) を認知発達到達点と想定し、それが幼児期にどのように理解されているかを検討することを目的としている。そのため、ビッグ・ファイブ的対人認知モデルを理解し、保持していると考えられる大学生を対象に予備調査を行った。

Table 1
最終調査における評定の平均・標準偏差及び特性の一致率 (%)

項 目		特 性					一致率
		外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性	
お外で走りまわって遊ぶ (外向性)	平均値	1.95	0.32	0.47	0.42	0.16	100
	標準偏差	0.23	0.48	0.61	0.51	0.5	
お友達が泣いていたらなぐさめてあげる (協調性)	平均値	0.84	1.79	0.47	0.89	0.42	89.5
	標準偏差	0.83	0.42	0.61	0.66	0.61	
きちんとお片づけをする (勤勉性)	平均値	-0.16	0.84	1.68	0.74	0.58	89.5
	標準偏差	0.76	0.5	0.48	0.56	0.61	
あまり泣いたり怒ったりしない (情緒安定性)	平均値	-0.65	0.29	0.24	1.59	0.53	100
	標準偏差	0.7	0.59	0.44	0.62	0.51	
なぞなぞがすき (知性)	平均値	-0.16	0.26	0.68	0.26	1.68	94.7
	標準偏差	0.76	0.56	0.67	0.56	0.58	

注) 評定者は 19 名 (男性 7 名, 女性 12 名, 平均年齢 21.8 歳) であった。

Table 2
特性判断の対象に対する担任保育士の判定結果

対 象	特 性				
	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知 性
A	5 ^{a)}	3 ^{a)}	2 ^{a)}	2 ^{a)}	5 ^{a)}
B	5 ^{a)}	3 ^{a)}	2 ^{a)}	2 ^{a)}	5 ^{a)}
C	5 ^{a)}	3 ^{a)}	3	1 ^{a)}	—
D	4 ^{a)}	4	4	5	2 ^{a)}
E	4 ^{a)}	3	4	4	2 ^{a)}
F	4	3 ^{a)}	4 ^{a)}	1 ^{a)}	5
G	4	2	3 ^{a)}	1 ^{a)}	4

^{a)} 実際に質問した特性。

かから特性判断の対象とする園児を選別した。当初は、当該特性のみの得点が高くかつそれ以外の 4 特性の得点との間に差がある園児を各特性につき 2, 3 名選出する予定だったが、担任保育士の評価が全体的にポジティブ方向に偏っていたためそのような条件にあてはまる園児はいなかった。そこで 5 特性のなかで対を作り (全部で, ${}_5C_2=10$ 対), その対における得点差が大きい園児を特性対ごとに 2 名ずつ選んだ。参加者に対して行う質問の数が最小限になるように、複数の特性対にわたって重複して同一の園児を対象として選んだところ、最終的に対象は 7 名 (男児 3 名, 女児 4 名), 質問数は 22 となった。詳細については Table 2, Table 3 に示した。

手続き 個別面接により行った。調査にかかった時間は参加者 1 人あたり 10 分程度であった。参加者には、各特性を表す 5 種類の行動が、対象である 7 名においてどれぐらいの頻度で観察されるかを小円・中

円・大円が描かれた紙からそれぞれ選択させることで 3 段階評定 (“全然”, “ときどき”, “いつも” の 0-2 点) をしてもらった。対象となっている園児が回答者となった場合は、本人に関する質問のみを除外した。評価してもらう対象の順序と同一対象内の質問の順序はランダムにした。

教示 “これから〇〇ちゃん (対象となっている園児の名前) についてお話を聞かせてね” と前置きし、外向性についての質問なら “〇〇ちゃんはいつもお外で走りまわって遊んでいるかな? ときどき走りまわって遊んでいるかな? 全然走りまわって遊ばないかな?”, 協調性なら “〇〇ちゃんはお友達が泣いていたらいつもなぐさめてあげるかな? ときどきなぐさめてあげるかな? 全然なぐさめてあげないかな?”, 勤勉性なら “〇〇ちゃんはいつもきちんとお片づけをするかな? ときどきお片づけをするかな? 全然お片づけをしないかな?”, 情緒安定性なら “〇〇ちゃん

Table 3
特性対の割り当てと担任保育士の評定における得点差

対 象	特性対									
	外>協	外>勤	外>情	外>知	協>勤	協>情	協>知	勤>情	勤>知	情>知
A	2	3	3	—	1	—	2	—	3	3
B	2	3	—	—	1	—	2	—	3	3
C	—	—	4	—	—	2	—	—	—	—
D	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
E	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
F	—	—	—	—	—	2	—	3	—	—
G	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—

注) 数値は担任保育士の評定における実際の得点差を表す。例えば, “外>協”の場合, 対象 A あるいは B の外向性と協調性が特性対の比較対象となる。—はその対において比較される対象ではないことを表す。

Table 4
参加者における特性判断の平均値の差の検定 (片側検定)

特性対	対象 1				<i>t</i> 値	対象 2				<i>t</i> 値
	特性 1		特性 2			特性 1		特性 2		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
外>協	1.48	0.65	0.64	0.76	4.94***	1.40	0.65	0.64	0.64	4.57***
外>勤	1.48	0.65	0.84	0.75	3.36**	1.40	0.65	1.08	0.64	1.88*
外>情	1.48	0.65	0.96	0.89	2.98**	1.68	0.56	0.80	0.65	5.28***
外>知	1.41	0.65	1.21	0.72	1.04	1.44	0.58	1.00	0.82	1.96*
協>勤	0.64	0.76	0.84	0.75	-1.22	0.64	0.64	1.08	0.64	-2.86
協>情	0.96	0.73	0.80	0.65	0.89	1.16	0.80	1.04	0.73	0.65
協<知	0.64	0.76	1.20	0.82	2.91**	0.64	0.64	1.21	0.72	2.09*
勤>情	1.40	0.65	1.04	0.73	1.67+	1.08	0.76	0.80	0.71	1.23
勤<知	0.84	0.75	1.20	0.82	1.47+	1.08	0.64	1.21	0.72	-0.20
情<知	0.96	0.89	1.20	0.82	1.06	0.80	0.65	1.21	0.72	-0.49

注) 本研究では参加者に二つの対象に対して特性判断をしてもらっている。具体的な対象は Table 3 参照。なお, 特性は 1, 2 は特性対の見出しの順序に相当する。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$.

んはいつも泣いたり怒ったりするかな? とときどき泣いたり怒ったりするかな? 全然泣いたり怒ったりしないかな?”, 知性なら “○○ちゃんはなぞなぞを出されたらいつも答えられるかな? とときどき答えられるかな? 全然答えられないかな?” とそれぞれ尋ねた。

結 果

まず, 特性判断における参加者の評定値の平均と標準偏差を算出した。担任保育士の評定を参考にして各特性対において 2 特性間の得点差が大きい園児を判断の対象としたが, 参加者による判断にも同様な差が見られるかどうかを検討するため, 10 特性対における対象各 2 名についてそれぞれ *t* 検定を行った (Table 4)。その結果, “外向性・協調性”, “外向性・勤勉

性”, “外向性・情緒安定性”, “協調性・知性” の 4 対については 2 名両方に対する判断に有意差が見られ, “外向性・知性” については 1 名に対する判断のみに有意差が見られた。“勤勉性・情緒安定性”, “勤勉性・知性” の 2 対については 1 名に対する判断のみに有意傾向が見られた。そのほかの “協調性・勤勉性”, “協調性・情緒安定性”, “情緒安定性・知性” については 2 名どちらに対しても有意差は見られなかった。

このことから, 5, 6 歳児においては “外向性・協調性”, “外向性・勤勉性”, “外向性・情緒安定性”, “協調性・知性” の区別はできており, “外向性・知性”, “勤勉性・情緒安定性”, “勤勉性・知性” は区別しつつあると結論づけることができる。また, “協調性・勤勉性”, “協調性・情緒安定性”, “情緒安定性・知性” については区別できていないとはいえなかった。

考 察

本研究の目的は、従来の幼児における性格研究のなかで用いられてきた架空の人物に対する行動予測ではなく、実在の人物に対する行動予測を 5, 6 歳児に行わせ、幼児の特性概念がビッグ・ファイブの次元において相互に分化しているかどうかを検討することであった。

特性対について予想された差が幼児の判断に見られるかどうかを検討した結果、“外向性・協調性”、“外向性・勤勉性”、“外向性・情緒安定性”、“外向性・知性”、“協調性・知性”の 5 対において有意差が見られた。また、“勤勉性・情緒安定性”、“勤勉性・知性”においても有意傾向が見られた。

このように、外向性のみすべての組み合わせに差が見られたことは、少なくとも、クラスの仲間の性格特性を判断するとき、幼児が外向性の次元を他の次元から区別して評価していることを示唆する。例えば、お外で走りまわって遊ぶことが多いことが、必ずしもお友達が泣いていたらなぐさめてあげることが多いことを意味しないことを理解している。また、協調性と知性が区別されており、また勤勉性に関しては分化しつつあることから、外向性以外の次元に関しても、幼児の特性概念が分化しつつあることが分かる。

林 (2004) は、幼児が幼稚園年長児頃から全般的な“良い”次元を内容とした性格特性概念を獲得し、発達とともに次元を分化させ、最終的に小学生高学年頃に成人同様ビッグ・ファイブ概念を獲得すると主張した。本研究の結果は、クラスの仲間に対して、外向性次元を他の次元と区別して評定しているなど、架空の人物に対する場合に比べて早期に、ビッグ・ファイブの次元を理解していることを示唆する。幼児は、仲間との日常的なかかわりの経験から、まさにビッグ・ファイブの次元を形成し始めていると考えられる。

外向性が他の次元よりも明確に区別されていた理由として、外向性が活動性や積極性など、行動の量に関連する特性であることが挙げられる。一般に、人は、他者の行動を見て、その人の行動に影響を与える内的要因としての性格を推論しているが、その推論には行動の内容が重要な手がかりとなる。しかし、外向性の判断については、行動内容を手がかりとするのではなく、単にその人の観察された行動（その行動がどのような内容かに関係なく）の量のみを手がかりとすればよい。このように外向性判断は、他の性格特性の判断に比べて容易であるため、外向性次元の獲得も容易であると考えられる。

ただし、この考えに対して次のような解釈も成り立つ。そもそも、幼児の日常生活において、外向性の次元の行動の頻度は多く、その他の次元の行動（例えば、協調性の次元の“お友達が泣いていたらなぐさめ

てあげる”）は出現頻度が少ない。このため、幼児の判断は、本研究で取り上げた特定の外向的行動（お外で走りまわって遊ぶ）の認識に基づいているかもしれない。確かに、幼児の判断が単に特定の行動の頻度を反映し、性格特性の理解に基づいていなかった可能性も考えられる。しかし、林 (2004) でも、外向性次元の評定が他の次元の評定すべてと異なっていたわけではないが、いくつかの次元の評定と区別されており、外向性の判断が性格特性の理解に基づいていないという可能性は小さいように思われる。今後、実際の行動だけでなく、外向性の次元を反映した架空の行動（例えば、架空のお誕生日での行動）を予測させるなどの方法を用いることで、さらに検討を行う必要がある。

以下、本研究の方法論や結果に対するいくつかの解釈及び、考えられる今後の検討課題を述べる。本研究では、外向性以外の次元に関しては、相互に分化している明確な証拠が得られなかった。これに関しては、次のような可能性が考えられる。第 1 に、幼児の性格特性概念は、外向性以外について、林 (2004) の主張するように、全般的な“良い”次元を内容としているという解釈である。第 2 に、幼児の性格特性概念は、外向性以外についても、相互に分化している次元があるが、本研究で取り上げた表現が 5 特性を必ずしも適切に反映していなかった可能性である。この解釈が正しいならば、今後、5 特性に関する表現を工夫しながら、検討を行う必要がある。

また、幼児の性格特性概念には、ビッグ・ファイブとは質的に異なった幼児固有の次元があることも否定できない。そのような可能性を探るためには、今後、幼児の行動や言語データを質的に分析する研究が必要になるだろう。

さらに、本研究では、クラスの実在する仲間については、園児は“普段から交流をもっているため、性格推論に役立つ情報を得るのが容易である”という仮定のもとに検討を進めた。しかし年長児では、男女別々の仲間を形成することが多いなど、仲間関係によって相手の性格特性に関する理解が大きく異なっている可能性がある。そのため、評価する園児と評定される仲間との関係を考慮した研究を行うことである。また、本研究の結果は、対象としたクラスの子どものた性格特性の構造を反映していると考えられる。例えば、協調性と勤勉性に関する教師評定のばらつきは小さく、それらの特性に関する個人差が少なかったことが、特性間の区別を困難にしている可能性がある。様々なクラスにおける子どもたちの性格特性の構造を調べることで性格特性次元の分化と経験との関連を検討することも今後の課題である。

これまでの幼児の性格特性概念の研究では実在人物を対象とした研究は少ない。今後、本研究同様に実在する仲間を対象とする研究が行われるだろう。それら

の研究をすすめる際には、本研究における上記の改善点に留意する必要があるだろう。

引用文献

- 林 智幸 (2004). 行動予測から捉えた幼児の性格特性概念の内容 教育心理学研究, **52**, 52-60.
(Hayashi, T. (2004). What dimensions do young children's trait concepts have for the prediction of others' actions? *Japanese Journal of Educational Psychology*, **52**, 52-60.)
- Heller, K. A., & Berndt, T. J. (1981). Developmental changes in the formation and organization of personality attributions. *Child Development*, **52**, 683-691.
- 村上宣寛・村上千恵子 (1999). 性格は五次元だった——性格心理学入門—— 培風館
(Murakami, Y., & Murakami, C.)
- Yuzawa, M., & Harano, A. (1996). Development of the understanding of character constancy: Expectations of the behavior of friendly and unfriendly peers. *Japanese Psychological Research*, **38**, 181-191.

——2004. 4. 19 受稿, 2005. 7. 9 受理——